

孵化夫婦 ふかふうふ

奥さんが若くて羨ましい、多少私と口を交わすようになると、あちこちからそんな声が掛かります。好意から来る揶揄であるのは分かっていますが、それに関しては返事すらいたしません。無視を決め込むのです。どちらかと言えば無然とした態度を執っていると言うほうが正確でしょう。ずいぶん、一徹な人だ、変わり者だ、奥さんとのことに関してはこればかりも喋らないと思われませんが、大体、人様の夫婦に興味があつてあれこれと聞きただそうとするような輩には碌なヤツはいません。そういう御仁は私の方から敬遠します。手前が交際を願っている訳ではないので別に何とも思つていませんが。家内だつて薄々そのくらいな空気は察して、これも私と足並みを揃えて私の態度を支持します。もうこれまでどのくらい羨ましがられたり根掘り葉掘り聴かれたりしたことか計り知れません。その都度うんざりという気持ちです。尤も、家内が三十二歳、私が七十歳、であれば赤の他人が不思議がるのも無理からぬ話です。三十八歳の年齢差があるのですから傍の人間にしてみると驚きと羨望と不思議でいっぱいな気持ちなのでしょう。勿論、他人には私達の年齢差などはひとつも話していません。しかし、親子ぐらいの違いは歴然としていますから、興味深々、何んとか経緯を聴きだそうとするのも理解出来ないことはありません。女性でもそうらしいです。クリーニング屋の奥さんが、小学校のPTAで、鎌をかけて、と家内がこぼしていました。家内は、世間で謂うところの面長の美人です。擦れ違い様にじっと視線を当てる男も結構いるぐらいですから好い女性なことは明らかです。子供を二人産んで、最近は全体に匂うような色気が現れてきました。女盛りのしつとりした美しさと申したらいいのでしょうか。生活を一緒にする私も彼女の尊顔を拝するたびに思わずその優美さにうっとりします。仕事への意欲が増すというものです。多少、鈍のところがありますが欠点というほどのことはなく本来、性格も地味ですし綺麗好きですし、つつましさも身に付けていて、まあ私には過ぎたる家内であります。これらは彼女が天から与えられた恵みに違いないのです。小学生の頃はまったく普通の女の子でしたから。中学の義務教育すら満足に終えていない家内は学問が無いのを僻むこともなく、もう十三年私に連れ添っています。私も定時制の高卒ですから同じ非教養組、人生、貧乏くじを引いても、分を弁えている気立てのいい女房がいて元氣旺盛な子供を持つことぐらい幸せな実感はありません。子供は上が十二歳の男の子、小学六年生です。下は今年入学したばかりの一年生、六歳の女の子です。家内が二十歳の時と二十六歳の時の子供です。私にすれば孫のような年齢の二人から、お父さん、お父さんと呼ばれると、こんなに心地良い事はありません。つくづく人間の幸せを感じる所以です。人生の晩年になって神様がプレゼントしてくれたのでしょうか、今までが今まででしたか

ら何の変わりもない日常がこんなに素晴らしいものかと痛感しています。二人の子供は年老いた私を少しも厭わず、長男も娘も共々率先して家内の手伝いに励みます。洗濯物を取り込む、風呂を洗う、買い物に行く、と実にあつぱれです。・・・家内は或る老人介護施設へ賄い班として働きに出ています。無論、私もまだまだ現役で相変わらず某大学の清掃仕事をやっています。六十五歳から受け取る魚屋時代のささやかな年金、プラス私と家内の収入の三つを合わせものが家族四人の生活の基盤になっています。・・・このアパートの住まいですか？下の部屋三つ借りています。もう二十年近く経つでしょうか、家賃は手頃な値段ですからすつかり腰を落ち着けてしまいました。それに大家さんには大変な恩義があつてが到底、移る気がしないのです。このアパートへ来るまでは息を潜める逃亡生活が続いたのですから。・・・誰も本気になさらないでしょうが冷や汗ものの逃避行だったのです。後ろに手が廻るような犯罪に手を染めたわけではありません。いや、あるいはそれに近かったかもしれませんが、何せ、十二歳の女の子を匿ったのです。後々知ったのですがこれは略取誘拐、若しくは未成年者略取の罪というのに該当するそうです。この犯罪は大変罪が重く罰則も厳しいと聴きました。三ヶ月以上五年の懲役に処す、と教わりました。あろうことかそれを私はやつてしまったのです。しかし、私と彼女は念入りに話し合わせ合意で行なつた行為なので、万が一に捕まつたとしても罪一等は免れると思っていました。その女の子というのが家内のことです。いずれにしましても十二歳の少女と私はひそかに同居していたのです。詳しいことは後に譲りますが、こうした経緯があつただけはお話しておきましょう。・・・このアパートは上にも同様に部屋が三つあります、此処も六人の大家族が借り切って住んでいます。ご主人は五十代の会社員で真面目そうな人物、奥さんも同年輩ぐらいで子供さんが大学生の男の子と高校生、中学生、小学四年生の女子三人、一男三女の六人の家族構成です。奥さんは近くのスーパーで働いていて家内は時々特売情報を教えてもらい、助かる、助かる、と申しています。大学生のお兄ちゃんや高校生のお姉ちゃんはおアルバイトをやっているようです。ウチの娘が小四のお姉ちゃんに遊んでもらっていることもありましたが、アパートへの入居はウチのほうかはるかに古株だから多少気を遣つてくれていたんでしょう。ご主人の帰宅は遅くて滅多に顔を合わす機会もありません。まあ、共同住宅というのは却つてそれがいいのです。築三十年が経つという木造二階建てアパートの大家さんは近くの通りに構えがある米屋さんです。先代が五年前に亡くなり今は四十代の息子さんがあとを継いでいます。先代の奥さんはまだ健在で米寿が近いらしいのですが、先代とこの奥さんが私どもの夫婦を大層慕ふにしてくれたのです。家内を実の娘のように面倒見てくれたり子供達も孫のように愛しんでくれました。怯えるようなひっそりした日常を送る私達に何くれと支えになってくれました。私達のあれこれをこれっぽちも訊くことも尋ねたこともありません。恩を施しながら些かも恩着せがましい言葉や態度を示しません。

人間が出来ていると云つたらいいのでしょうか、苦勞人と云つたらいいのでしょうか、小さな身体と大きな心で私達を庇かばってくれたのです。人情、廢すたれず、と思わず叫んでしまいそうな感謝の気持ちがずっと続いています。．．．ところで最前お話しした通り私は今年、七十歳の古希を迎えました。今、こうして穏やかな日々を送っていますが今までは逃げ回る生活だったと先ほど申しました。その曲折をお話ししておこうと思ひ立ったのです。動機にはこれと云つて理由がある訳ではありませんが何かしら一部始終を詳つまびらかする義務のようなものを漠然と感じ始めたからです。幸せを戴いたお礼と申しましようか、私の晩年を輝かしてくれた人生に、精一杯の感謝を込めて、と申しましようか。――

家内と私が知り合つたのは今から二十年前のこと、私が五十歳、家内が小学校の六年生、十二歳の時でした。当時私は家内が通学していた小学校の警備員の仕事をやっていました。それまでは中学を卒業して三十数年、魚屋の売り子、販売員として奉公していたのですが、その勤めていた魚屋が店を閉じたのです。スーパーマーケットに客を獲られてどうにもならない状況に追い込まれました。一代でのし上がったやり手の社長も高齢になり後継者もない上に斜陽となつた商あないの店終みせじまいは当然の成り行きだったのです。さて、五十歳になつて放り出された私は、途方に暮れました。独り身ひとりみであり、これと云つて何か資格や特技がある訳でもありません。定時制高校へ通わせてくれた恩ある社長も心配して、いろいろ同業者に当たつてくれましたが、いずこも同じ黄昏たそがれの経営状態で芳かんばしくありません。それに、私は商売で頭を下げるのにもう飽きていましたから、いっそ全く別な仕事をやってみたいという密かな願望があつたのです。生まれて初めてハローワークへ通いました。ハローワークは職を求める人達で大混雑です。これも私の驚きでした。履歴書も初めて書きました。が、五十歳を数えるともう仕事の選択も限られるようです。何度か足を運ぶ内にハローワーク職員さんに小学校の警備員はどうですかと勧められました。向こう鉢巻の魚屋から制帽制服の警備員のガードマン、自分でも予想外の仕事の世界が待っていたものだともこれも内心びつくりでした。躊躇ちゅうちゆしていたら何時までも収入がありません。止やむを得ずという気持ちだつたことは事実です。数十人の警備員希望者と一緒に僅か一日の警備講習を受け九月の二期から区内の小学校へ俄にわかか警備員として着任することになりました。一校一人です。警備員の中には私よりもはるかな高齢者、七十代に見える老人もいたようですし三十代の若い人もいました。それぞれがそれぞれの込み入つた日ひくを抱えて仕事に就いたのでしよう。．．．仕事は、朝七時三十分正門の脇わきに立哨りつちやうし児童、職員を迎えるのです。私が担当する小学校は一年生から六年生まで生徒数は五百人弱、一学年が百人足らずの三クラス構成らしいのです。私の子供の頃と比較してもずいぶん少ないことを知りました。登校は八時前後がピークです。私は全員におはよう！とか、

おはようございます！とか声を掛けます。背の低い一年生や二年生のちびっ子たちにはしゃがんで視線を同じ位置に合わせて挨拶を交わしました。児童達はそんな警備員に喜んで元気良くお早うございますを大声で言ってくれます。中には警察官と勘違いして、おまわりさん、おまわりさん叫ぶ子供もいます。その度に私はそつと、おじさんは警備員さんですよ、と教えてあげたりしました。朝の元気のいい挨拶くらい気持ちの良いものではありません。黄色いくちばしが私に向かって関の声を上げるような具合です。もつとも、五、六年生になると、一部の生徒にはウンもスンもなく会釈もせずには校門をくぐる生徒もいました。発育が良くなり大人並みの身体付きで世間の情報を得るのも簡単のようです。警備員の社会的価値がよく分かっているようでした。敬礼はしなくていいのか、悪い人が来たらどういう方法で捕まえるのか、警官とどこが違うのか、二度、三度、私もやり込められた事がありました。いっぱしの口も利くし態度も物怖じしない誠に見上げたものです。女子児童などは服装でも替えたら成人女性と何等区別が付きません。訊くところによれば十二歳頃になると早い子は初潮もあるそうですし身体全体がふつくらしてきて充分女性と云えるのだそうです。四、五人で一緒に下校する時は遠くから見ても正に大人のグループという方が当て嵌まります。ひそひそと囁く姿などは例の井戸端会議を連想させるものです。恐るべき小学生、と申すような次第です。さまざまな出来事に内心驚いたり呆れたり感動したりしながら私は警備員としての役割を担っていききました。朝一時間の立哨が終わる頃、児童達はすべて教室に吸い込まれます。正門を施錠して三十分の休憩を執ります。たまに遅刻する児童もいますから休憩といっても校門から遠く離れる訳にはいきません。母親が付き添って来る場合もありますし拗ねたような様子でシブシブひとり歩いて来る児童もいます。そんな場合、私は努めて褒めてあげてあげてあげて心掛けます。暗い子供の顔付きが一瞬でも輝くからです。子供は褒めて育てる、叱るのに感情的にならない、これらのことは警備員を経験して私の頭に強く焼き付いた新しい真理でした。十時頃になると近くの保育園の午前中の巡回が始まります。(午後にもあるのですが)二百メートルばかりの場所に一歳児から預かる大保育園があつて私はその道路周辺と園内の巡回を行なうのです。ここではほとんどの幼児等が私をお巡りさんと思つて私に纏わり付きます。可愛いものです。いちいち説明するのもなんですから、保育園ではそのままにうっちゃっておくのですが・・・保育園に隣接して児童養護施設、光ホーム、というのがありました。保育園の巡回を終えても私はしばらくの間、その施設にまったく気が付きませんでした。丁度、死角のように建物が佇んでいたからです。一ヶ月も過ぎた頃午後の巡回中に集団の児童がその建物に消えるのをたまたま目撃したのです。私はウラへ廻つて建物の表札を眺めて納得しました。親に棄てられた不幸な子供や何等かの事情で親と同居できない子供達を保護して育てている施設だったのです。家内はその生徒でした。登校時、周辺の一年生や二年生の幼い生徒を引率し

てやって来る面倒見のいいおねえさん、と初めは思っていました。が事実は違っていたのです。校門前でぐずる生徒には耳元で何かこちよこちよと彼女が囁くと、ちびっ子達は頷いて、たちまち機嫌が直る、それはそれは見事な指導ぶりでした。そんなわけで次第に私もリーダーシップのある六年生の彼女の態度を注目するようになったのです。・・・或る日、午後の保育園の巡回中、彼女が引き連れる一団と私は一緒になりました。水曜日は全校早退の日です。午後一時間の授業だけで終わりでしたから下校中の彼女等とぶつかったのです。保育園への道を歩く私を意識していたのでしょうか、彼女が困ったような表情をしているのが私の眼に焼きつきました。急ぎ足でホームの建物に消えて行ったのも知りませんでした。六年生にもなれば自分の置かれた境遇が分かりすぎるほど分かっているのでしょうか。不憫ふびんといましようか、私の気持ちの中にも言うに言われぬ感情が涌わいたものでした。それ以後は多少なりに気を付けていましたが、これといって特別に何が起こったわけではありません。私もへんに安っぽい同情心を持つことは禁じていました。・・・冬休みが過ぎ三学期も終わり近くになると卒業式があります。或る日、これも午後の保育園の巡回の帰りでしたが私は彼女から手紙を受け取りました。(警備員さん、ハイッ!)三、四人ばかりの生徒が私の周りを囲んでいました。そつと開ひらいて見るとこんな内容のものでした。二十年以上経った今でも、家内に内緒で私の抽斗の奥に仕舞ってありますから、ここに全文を披露しようと思いません。

警備員さんへ

おじさん、毎日ありがとうございます。わたしたちが安心して学校へ行けるのも、勉強できるのも、警備員さんがいるおかげです。雨の日も風の日もほんとうにありがとうございます。

おわり

力強い上手な文字で書いてありました。たったこれだけの文章ですが、私にとっては最高のプレゼントです。これを渡してくれた時のほにかんだ表情も忘れません。おそらく、施設の職員から指導されて書いたに違いありません。給食室の職員さん、清掃の用務員さん、児童主事さん、用務主事さん、がそれぞれ受け取ったと思います。毎年の定番行事かも知れませんが私には或る感動がありました。名前を覚えてもらおうと、春子です、と名乗りました。姓の方は教えてもらいませんでしたが。私は早速返事を書いたのを覚えています。おじさんもがんばるから中学に入ってもいっしょけんめい勉強してください。春子ちゃんへ、そんな他愛無わいお礼の手紙だったと記憶していません。・・・卒業式は体育館で行なわれました。お父さんやお母さんが大勢来賓として来ましたが警備員の私は校門で出迎えるばかりでしたから内容は分かりません。春子

ちゃんたちホームの児童達には三、四人の職員さんが来ていたようです。でも寂しい一日だったと思います。なぜなら、お父さん、お母さんがいないのですから、家庭が無いのですから。・・・四月、新一年生の入学や新任の先生が学校にやって来ました。運動会、遠足、社会見学、などがあつて一学期が終了します。警備員の仕事も夏休みは午前中だけの仕事になります。時給の賃金ですから七月、八月、は手取りが少なくなりませんが、これは仕事始めに知らされていきましたから仕方ありません。人によってはその間にアルバイト、お中元の配達であるとか限定のビル清掃などをこなすツワモノもいるという話を聞きました。私は独り身の気楽さで、のんびり過ごしたのです。・・・その夏休みに、運命的な出会いがあつたのです。こう申し上げればお分かりであろうかと思いますが。そうです、春子ちゃんと偶然にターミナルビルで会つたのです。八月の最初の日曜日でしたから忘れもしません。春子ちゃんのほうから、おじさん！と呼び止めてくれたのです。高校生くらいの感じでしたから、始めは誰かと思つてびっくりしました。とても中学一年生には見えませんでした。ひとりで買物に来たと言いました。それで私はつい、カキ氷でも飲もうと喫茶店に誘つたのです、暑い日でしたから。少し躊躇つていたようでしたが、おずおずと付いてきました。傍から見れば親子です。ポツリポツリ、中学校の生活を聞いていると、やはり、いじめが横行していて先生たちのいないところでの行為がすごいと言うのです。学校が面白くないと暗い顔で呟くように言うのでした。私は再び不憫を覚えました。が、その日は、三十分ぐらいで喫茶店を出て別れました。別れ際に春子ちゃんに、一週間後に又、おじさんと会おう、と約束を取り付けました。気晴らしに動物園にでも行こうか、と誘つたのです。ウン、頷く春子ちゃん。しかし、どこに誰の眼があるか分かりません。春子ちゃんが中年のおじさんと一緒だったことが知れたら大変なことになると思ひました。春子ちゃんも同じようなことを内心考えていたようです。養護施設では外出時には、外出先や何時から何時までの時間帯のこと、何の目的で誰と外出するか、などを記入して許可を得るのだそうです。当然といえばこれも当然なことですが。・・・春子ちゃんはこれらを上手く書き込んだのでしよう、当日、動物公園の入り口で落ち合つたのが開園の十時でした。朝から三十度近い猛暑日です。入場料は三百円、春子ちゃんも高校生に成り代わっているのですから同額を二枚分私が払いました。ひよろつとしてカマキリのような姿で背の高い体型の春子ちゃんは充分高校生に見えます。平日だったせいか園内はそれほど混んでいません。動物をゆつくり眺めながらその生感に感心したりしながら廻つたのです。春子ちゃんも大層無邪気に喜んでいました。アジア圏のウサギ、モルモット、ツル、北米圏のアムールトラ、ユキヒョウ、オラウータン、レッサーパンダ、アフリカ圏ではライオン、ゾウ、チーター、シマウマ、チンパンジー、昆虫館の展示などを午前と午後に分けて見学、園内の売店でハンバアーガーを買つて頬張ると私の口にマヨネーズが残っていると大笑いしたりしました。そん

なわけでもすつかり童心に帰りましたが、咆えまくるアムールトラの前では、その怖さに春子ちゃんが思わず私にすがり付いてきたりしたのです。十三歳といってもまだ子供だと思いました。本当に父子家庭のような感じがしたのです。・・・私の心中しんちゅうに一人前の女として眺めたことはなかったか？ですって、まあ、世間では中学生、高校生を相手に援助交際の報道もあることはよく知っていました。私自身はそのような想いは一向に考えませんでした。春子ちゃんが不憫だということが優先して、何んとかこの子を力づけて上げたい、その一念でした。それに再々言うように春子ちゃん、やせつびいですから本当にまだまだ子供の感じだったのです。しかし、その動物園からの帰り道、春子ちゃんが急速に私に悩みを打ち明けてきたのです。学校に行くのがもうイヤだと言うのです。イジメが横行して先生たちが知らない所で陰湿なグループイジメが行なわれるのだそうです。乱暴な男子や強い性格の女子等は施設の生徒をターゲットにするのだそうです。このままの状態が続けば学校を休んでどこか遠くへ行ってしまういとまで思い詰めていました。ホームを飛び出てもいい、とまで小さな声で苦しそうに言うではありませんか。さらに施設の若い男性の職員がイヤらしいこともすると告白したのです。誰もいない所で手を握ったり身体を抱きかかえたりするのだそうです。私は唾然あせんとしました。春子ちゃんへ返す言葉がありませんでした。それで出た言葉が、じゃあ、おじさんのマンシヨンに来るか！だったのです。当時、私は魚屋時代に買ったワンルームマンションに住んでいましたから子供の一人ぐらいの受け入れは何でもありませんでした。受け入れは簡単でしたが、さて、春子ちゃんが出た所を私に転がり込んで来たあかつきには、養護施設では一大事でしょう、方々へ搜索願を出すに違いありません。事故や事件に巻き込まれていないか、全国の警察に尋ね人の情報が行渡るはず。それを見越して私と春子ちゃんは実行に向けて用意周到に作戦を練り上げました。施設を抜ける時に春子ちゃんが自筆の書き置きを残す事でした。文面は、お世話になった事への感謝と、或る事情でしばらく遠くに住むけれど、決して探さないでほしい、いずれ何年か後には必ず、お礼に上がる積もりです、という簡単な内容を綴ったものです。彼女は難なんなくそれを書き上げました。もう八月が終わりに近い日の夕方のことでした。蒼ざめた暗い顔付きでマンションのドアを叩いて春子ちゃんが入って来ました。着の身着のままだったのです。養護施設は出たものの、これから始まる私との生活に不安でいっぱいだったのでしよう。想像して余りあります。私は努めてニコニコと笑顔で迎えました。何より安心させる事が一番でしたから。用意して買っておいた衝立つきたてを部屋の中央に立てて右側を私、左側を春子ちゃんが使おうと決めました。少しでも彼女のプライバシーを尊重しなくてはなりません。タオルゲットとせんべい蒲団も用意してありました。夏ですからそれで充分です。初めの夜、私と春子ちゃんは遅くまで掛かって、これからの生活の決め事を作りました。

- 一つ、当分、春子ちゃんは絶対外出しないこと、
- 二つ、おじさんをお父さんと呼ぶこと、
- 三つ、お父さんが仕事の時には鍵を閉めるか内側からのサムターン鍵で閉めておくこと、
- 四つ、お父さんの留守中に誰かがピンポンを押しても出ないこと、
- 五つ、食べ物や必要なものはお父さんが買ってくるので希望を紙に書いておくこと、
お風呂はお父さんがいない午前中でも午後でも入ること、下着は毎日替えること、
- 六つ、掃除はしても窓を開けないこと、洗濯はコインランドリーでお父さんの役目、
- 七つ、テレビを見てもラジオを聴いてもいいが、なるべく本を読むこと、読みたい本があればお父さんが買ってくる、
- 八つ、二人はそれぞれ蛍光灯スタンドを使う、隠し立てをしないこと、
- 九つ、春子ちゃんは室内運動をして体調に気を付けること、
- 十、清潔、快適な生活を目指すこと、

私はカレンダーの裏の白い部分にマジックでこの十の約束事を大きく書いたのです。そうして窓際の壁に貼りました。それを眺めていた春子ちゃんの表情が柔らかくなったのをあざやかに憶えています。不安で不安でいっぱいだったのでしょうか。終わると春子ちゃんは子犬のようにぐっすり寝てしまいました。私にも警備員の仕事がありましたから直ぐにイビキを掻いたようでした。・・・一日目、二日目、三日目、と二人の生活が始まりました。夏休みの警備仕事は午前中だけでした。勤務先の小学校は私のマンションから二駅先ですから終わるとコンビニで買った弁当や、スーパーで買った二人分の昼食を急いで持ち帰って食べたのです。巣穴で待つ雛に餌を上げる心境でした。午後六時、私は毎夕、駅前の銭湯に出掛けます。マンションの浴室は春子ちゃん専用にしてあげました。春子ちゃんに裸姿さえ見せませんでした。私も私なりに気を遣ったのです。そういうするうちに春子ちゃんが、自分でご飯を炊くからお米や野菜を買ってきて欲しいと言うのです。料理が出来るの？と訊くと、施設で給食のおばさん達のお手伝いをしたことが何回もあるというじゃありませんか。味噌汁も作れる、おかずも大丈夫だそうです、へえーとびっくりしました。大したもんです。正直、感心しました。食卓に手作りの野菜の天ぷらやサラダ、味噌汁が並ぶのは久しぶりの事でした。それ以降は私は専ら買出し専門人になった次第です。パシリだね、と二人で笑いあいました。そう、使い走りのお父さんでした。その後、中学校の方はどうなったかは分かりませんが施設のほうは大慌てだったろうと思います。これもあとで聴いた事です。が中学時代の生徒は夏休みが一番変りやすいのだそうです。二学期に

なると分かる事らしいのですが、言葉遣いが乱暴になったり服装が乱れたり中には髪を染めてくる生徒もいるのだそうです。四十日のお休みは良くも悪くも子供を変化させる、春子ちゃんも多分、そのケースに括くられたと思います。家出、失踪ですから・・・私との同居が分かれば間違いなく私は児童福祉法違反で検挙されるでしょう。でありますから、私は何度も壁に貼った約束を守るように春子ちゃんへ言い渡しました。いっぽう、春子ちゃんが里心を出さないか、その一点が何時も心配の種でした。だが、私の不安は的外れで終わったようです。春子ちゃんは外出もままならぬ自分をよくコントロールして元気に暮らしてくれました。何も苦にしないようでした。だから、本当の親子のような感じなのです。後悔している様子はツメの先ほどありません。毎晩の食事が楽しみになりました。時には断って缶ビールを呑む日もあったのです。春子ちゃんは喜んで奥さん役を担になってくれました。だが、学校に行かない心配がありました。しかし、日常生活に必要な、読み書きソロバンが不自由なく出来れば世間は何なんとか渡つていけます。最低限度の読み書きさえ出来ればそんなに困る事ありません。五十年の私の人生を振り返つてつくづくそう思っていましたから。そのうち、私を悩ませ始めた事案がありました。三ヶ月も外出しない春子ちゃんが急に太り始めたことでした。運動不足もあるでしょうが発育盛りに入ったのかもしれないと。少女から乙女らしく、ふつくらしてきたことです。赤の他人である一人の乙女との同居、私は努めて、その気持ちを削ぐ事に専念しました。自分はこの子の父親なんだと何度も言い聞かせたのです。そんな私の気持ちとは裏腹に春子ちゃんはすっかり逃亡生活に慣れてしまつて、お父さん、そろそろ表に出てみたい！とおねだりをするようになったのです。まだまだダメだ、と私は用心に用心を重ねました。いじらしいほど私の言う事に逆さからいません。そうは言つてもこの狭い空間にずっと閉じ込めておくのは本当に残酷な気持ちがありました。態たいのいい幽閉ゆうへいですから。何とか機会を見つけて表に出してやりたい、そう思う気持ちが募もります。それで私は或る眼鏡店で度の無い安物のメガネを買つてきて春子ちゃんへ掛けさせました。すると、どうでしょう、もうれつきとした別人の顔になったのです。その上に、中学生の年齢には見えませんでした。勘が当たりました。変装が功を奏したのです。それから平日の外出を許可しました。無論、メガネを掛けてです。土曜日や日曜日は施設関係の誰の眼に触れるか分かりませんから避けさせました。春子ちゃんは秋の空に飛び交う赤トンボのようにスイスイと外出を喜びました。しかし、内心、やはり心配があったのでしよう、滅多に表へ行くことはありませんでした。その年も終わる十二月、私はひそかに考えていたマンション売却を決意しました。ビクビクして生活を送るこの地から少し遠くへ引越そうと考えたのです。駅前の不動産屋さんによれば価値は半減して二十年前、千六百万円で購入した（ローンでしたが）部屋は八百万円の価格が好いところだと値切られました。仕方ありません、私はどうしても二部屋が欲しくなっていたのですから。手数

料や諸経費を引くと手元には七百万円余しか残らず、これでは新しいマンション、と云う訳にいきません。そんなこんなで、こちらの木造二階建てのアパートにご縁を頂いたような次第です。ここは私の勤務した小学校（春子ちゃんの母校）や、彼女がお世話になった児童養護施設から遠く離れた東京の下町でありましたから、それまでの絶えず気を遣っていた生活状況とは雲泥の差になりました。手足をのびのびと伸ばし思いっきり空気を吸うことが出来たのです。春子ちゃんと顔を見合わせて何度も笑顔を作ったことがありました。当然、警備員の仕事はその十二月で辞めました。仕事は都心の某大学の清掃仕事が決まっていたから不安はありませんでした。朝の七時から午後四時まで、各教室や研究棟、職員室、事務室等を十人の清掃員で受け持つのです。以前の警備員時代より月の収入は若干増えました。それにマンションの売り上げは手を付かずに貯金に回していましたから経済的には楽でした。お金のゆとりが出来ると良いお父さんになっているのが自分でも分かります。ぶりっこみたいなものですが。現金なものです。ただ、大家さんには入居の際に、二人の間柄の説明に困りました。しかし、あれこれと詮索するタイプのご夫妻ではありませんでしたから、或る事情で私が引き取った身寄りのない子供だと告げて了解を得たのです。ご夫婦は私を奇特な人と考えたのかもしれませんが。更には込み入った事情があるのだろうかと思つてくれたようでした。このアパートへ入居したのが三月ですから、四月が来れば春子ちゃんは十四歳になります。六畳、六畳、三畳に風呂場と台所の間取りでしたから私たちは別々に一部屋を使うことになりました。小躍りする春子ちゃん。住まいに落ち着いた四月の或る日、春子ちゃんが働きたいと申します。私が身元さえ保証してくれば幾らでも働き場所はあるのだそうです。自分なりに考えていたのでしよう、私は素直に賛成しました。もう、こそごと隠れるような行動はゴメンだという強い気持ちがありましたから。春子ちゃんはデパートの大食堂の洗い場の仕事を見つけたのです。新聞のチラシ広告の募集で見たとようでした。嬉嬉として出掛けて行く彼女。年齢は十七歳と記入。サバを読むというヤツです。履歴書を見た採用者は何も疑いもせずにその場で決めてくれたと話しました。父子家庭を装った春子ちゃんの手動に感心した一件です。さあ、そうなるかと私と春子ちゃん二人で稼ぎ出すのですから僅かなゆとりが出てきます。ダンスや家具を調達したり鍋を買い込んで、すき焼や焼き肉の夜食をとつたりと、今まで考えられないような楽しい生活が始まりました。しかし、ここでひとつ大きな問題が浮び上がりました。彼女の住民票のことです。今のままでは春子ちゃんは無戸籍が続きます。今後の生活に何かと支障をきたします。養護施設から家出、行方をくらましている児童などは口が裂けても言えません。訊くところによれば、家出は失踪と同じで、普通は七年間が経つと死亡宣告がなされるのだそうです。七年間は実に長いと考えました。万が一、彼女に病気や事故があった場合、病院や警察で事情を聴かれれば私はたちまち捕まってしまう。そこで知恵を

働かせました。先代の大家さんご夫婦に春子ちゃん出奔の経緯を申し述べて彼女の移動先をこのお米屋さんにしてもらうことをお願いしたのです。当然、早晚、施設からは職員さんが尋ねてくるに違いありません。さらに近くの派出所から警官がやって来ること想定されます。その場合、本人の春子ちゃんは今のところ誰にも会いたくない、面接したくない、という理由で対応をお願いしたい、また、お米屋さんとの関係を聞かれても遠縁の者との一点で打ち切って欲しい、誘拐や脅迫の事件に巻き込まれたのでないこともはっきり申し述べて欲しい、私と一緒にすることも内密にして欲しい、と、ずいぶん虫の良いことをお願いしたのです。ご夫婦にすぎるように私は土下座で懇願しました。春子ちゃんは私のいない別の日に、旦那さんや奥さんが部屋にやって来て、私に上手く騙されていないか、あるいは脅かされているのではないか、とあれこれと事情を問われたと後で打ち明けてくれました。春子ちゃんは、おじさん（私のことですが）と生活がしたいだけ、そう言ったのだそうです。思わず涙が浮んでしまふではありませんか。案の定、お米屋さんが施設へ連絡を取ると二人の施設職員さんがやって来たそうです。お米屋さんの対応がしつかりしていたのと住んでいる場所が判明した事で、止むを得ない事案と判断して帰ったと聞きました。結局、お米屋さんの養女という形式で住民票、移動証明が発行されたのです。非常に厄介な問題を、私と春子ちゃんの立場に立つて解決してくれたご夫婦は、我々にとつて真正正銘の恩人と申しても過言ではありません。私はご夫婦を裏切らないためにも春子ちゃんとの日々の生活を貴重な宝物として過ごしていこうと決意を新たにしました。晴れて、表へ出かけることが自由になりました。どのくらいこの日を待ち望んでいたでしょうか。二人はショッピングモールやデパートへ足を運びました。たくさんのお買い物をしました。ほのぼのとした幸せを感じる日々がやってきたのです。しかし、一方私の気持ちの底には、年頃が来れば春子ちゃんも結婚させなくてはいけないという使命感のようなものが横たわっていたのです。手塩に掛けた娘を盗られる複雑怪奇な父親の気持ちに痛いほど分かります。それに私には何時になっても、春子！と呼び捨てには出来なかつたのです。他人だという意識が何処かで働いていたのでしょうか。もっぱらハルちゃん、ハルちゃん、でした。絆と申しますか結びつきは強かつたのですが・・・一年、二年、三年もすると少女だった彼女が段々乙女らしくなってきました。友達も何人か出来て青春が始まったのでしよう、言い寄るボーイフレンドもいるようでした。そんなことを快活に私に話してくるのです。しかし、彼女は、男女問題には硬いと申しますか晩生と申しますか一向に恋愛感情が生まれそうにありませんでした。仕事が終われば直ぐに帰宅してアパートの三部屋を掃除し洗濯物を取り込み晩御飯の支度を済ます、楽しみはテレビと音楽だったようです。テレビは時に一緒に見ることもありませんが後片付けが済むと自分の部屋へいつて音楽を聴いているようでした。耳にイヤホン当てて静かに過ごしています。どんな音楽かは知りませんが、きつと気持ち

癒いされるのでしよう、健け気、という言葉が自然に浮んでくるような子供、いや、乙女でした。朝は無論私より早起きです。コーヒーだけの私が先にウチを出ます。春子ちゃんの出勤は八時ごろで、その間は部屋かんの掃除や洗濯、風呂洗いと精を出してくれるらしいのです。大体が綺麗きれいすぎでした。施設の職員さんが半年に一度の割合でお米屋さんへ春子ちゃんの近況を尋ねに来るようでした。が、頑がんとして職員との面会を拒む春子ちゃん、意志の強さは半端はんぱではありません。・・・春子ちゃんが二十歳はたちになりました。成人式が近付いて来ました。娘盛りといいましようか、やせつぴいだった春子ちゃんがころころと健康的に太って、俗に言うところの、箸はしが転んでも可笑しい年頃を迎えたのです。匂うような若さが見てとれます。私は五十八歳、成人式は下町の公会堂で行なわれる予定でしたから予ねてから考えていた春子ちゃんの晴れ着、着物をプレゼントすることに決めました。ところが、春子ちゃんはウンと頷うなづいてくれません。スーツで良い！と言うのです。百万を超えるような着物を買う必要ありません、ときっぱり口にするではありませんか。私にしてみれば待ちに待った期待を、裏切られたようで悔しいやら寂しいやら妙な気持ちでした。しかし、よくよく考えてみればそれは私の勝手な期待であって春子ちゃんには何の罪も無いのです。彼女の気持ちを尊重することが日頃から一番と思っていましたから強要はしませんでした。しつかり者に育ったことが別な意味で私には嬉うれしかったのです。ところが成人式が済んだ或る日曜日、春子ちゃんが置手紙をして外出したのです。何だろうと思つて開いてみると、驚く事に、小父おじさんと結婚したい！と短く書いてあるではありませんか。バカらしい！バカな！私が呆然ぼうぜんとしたのは極く当然でした。ふざけるのもいい加減しろ！そんな心境でした。しかし、何か訳の分からないもやもやした気分が身体中を駆け巡ったのも事実です。私の気持ちの中にはハルちゃんを女として見る気持ちは疾とうに失せていました。自慢の娘と考えるばかりでしたから。困りました。夜遅く彼女が帰つて来ましたが私は一言、お帰り！と言うだけで目も合わせませんでした。翌日も、その翌日も、私は無言で、なお且つ怖い顔をして春子ちゃんに向き合いました。自分でも気持ちの整理が付かないのです。春子ちゃんも無論、口を利ききません。話をしません。一週間ぐらい経った日でした。私は大家さんのおじさん、おばさんに相談してごらん！と言ったのです。すると、待つていましたとばかり、ハイッ！澄んだ声で何の屈託も無さそうに、そう返事をするではありませんか。その時、なぜか、ああ！万事休す、と思つたのです。不思議なことには私の中に、或る期待がありました。きちんと育て上げた満足感、それと共に誰にも渡したくないと思う独占欲です。針の穴へ糸を通すような微かかな期待が私の頭にも隠れていたのでしょうか、頭を何度も左右に振つたのを覚えていています。当然、大家さんのお米屋さんご夫婦は、まさか！と驚いたと後で種明かしをしてくれました。何も親子ほど歳の違う人と結婚しなくても、と、諭さとされたとい

います。もう子供ではありませんから、小父さんに騙だまされているとか脅おそかされている

とかはひとつも無いことを強調したのだそうです。これには大家さんも頷くだけと述べていました。それと、ものすごい決定打があつて、その言葉を聞いたら何も言えませんでしたよ！と老奥さんが私に茶々を入れるのです。決定打とは何か？春子ちゃんにとって、私は初恋の人なのだそうです。つまり英語でいうところのフアザーコンプレックスである、猛烈な感情を抱え込んでいたのです。お父さんが恋しい！そんな感じだったのでしよう。理想像を私に重ねていたわけです。理想とははるかに程遠いことは私自身、充分承知していましたが。養護施設の窮屈な生活の中で、中学校の希望のない生活の中で、彼女は健全な青春を送っていなかった、それでたまらなく寂しかったのです。・・・私と春子ちゃんは大家さんが持ち掛けてくれた祝言しゅげんも断りました。今まで通りの生活でよかつたのです。ただ、子供を早く欲しいと希望するハルちゃんでしたから、その意向は無視できませんでした。眠っていた私の男の本能に火が付いたのです。毎日毎夜が幸せでした。なんだ！カッコウ付けて！、と冷やかす人には、どうぞ、どうぞという気持ちです。二十歳と五十八歳の新婚生活がスタートしました。そうして直ぐに子供を授かつたような次第です。赤ちゃんが誕生して間もなく春子ちゃんも赤ちゃんと伴って八年ぶりに施設を訪ねました。勿論、私は遠慮しました。施設は半分ぐらいは職員さんが替わつていたようです。それでも施設長や世話になつた職員さんにお礼とお詫びをして帰つて来たと言しました。心に引つ掛つていたことが漸く片が付いたのでほつとしたと胸を撫なで下ろして行きました。ご主人はどんな人？仕事は？という問い掛けがあつたそうですが、若くてやさしい人です、仕事は内緒、と答えた私の前でしゃあしゃあと言うではありませんか。すでに禿げ上がつていてウダツが上がらない私は破顔一笑、また、涙を浮かべたのは歳のせいばかりではありません。ハルちゃんの心根が憎いばかり、ますます愛いとおしい気持ちが強くなりました。・・・一体全体、このような不思議が世の中にあるのでしょうか、自分でもまだ信じられないのです。人生の晩年に迎えた奇蹟のような幸福、世の中、捨てたものではないな！つくづく思いました。愚直に生きて来た私へのご褒美であれば、両手を合わせて感謝を捧げたいと思うのです。上の息子が二十歳になる頃、私は七十八歳、家内は四十歳です。我が父は米寿の八十八歳、母は九十三歳まで健在でしたから、多分、私も九十近くまで元気だろうと思います。大家さんの奥さんは、綺麗な春子ちゃんといふから私が十歳近くも若く見えると感心しながら、若作りの秘訣はなに？子作り作業？と戯たわけを言つて笑わせます。ひそかにバンザイを叫ぶ私、七十歳の今は青春真っ盛りなのです。近くにある隅田川の土手を突つ走りたいような最高の気分がやつて来ます。

手前の喜びばかりを綴りました。人生、お前のような果報者ばかりじゃあない、たまたま運が好かつたのだらうとお叱りを受けるかもしれせん。あるいはそうかもし

れません。しかし、しかし、です。春子ちゃんへの誠意を貫いた一念があつたからこそ六十歳近くになって彼女から、初恋の人です、などと告白されたのです。瓢箪から駒のような信じられない出来事、まったく男冥利おとこみょうりに尽きるじゃありませんか。春子ちゃんを守ったからこそ生まれた言葉なのです。十三歳から二十歳を迎えるまでの七年間、彼女と同居しながら私は男という性を封印してきました。他人には、綺麗ごとを云つて、と疑われるに決まっています。じゃあ、男性の欲望が本当に無かつたのかと指摘されれば、正直否定は出来ませんでしょう。偶たまに浮びあがる厄介やっかいな性を閉じ込める手段はアルコールしかありませんでした。缶ビールをどのくらい飲むようになったことか。私だつて聖人君子であるはずがないのですから。それと、悪所通いが偶にあつたことを白状しなければなりません。だから、お父さん役を演じることが出来たのです。結果、六十代で子を二人も成なしたのだつて私の命の前進です、五十歳までの人生と比較すれば奇跡に近い、最終コーナーでの感動の人生です。

この頃私には、はるか昔の魚屋時代、店に刺し身を買いに来てくれたアメリカ学生のグレンフォード君がよく使っていた、ノー、プレブルム（問題ない！）、ハウワユー（お元気ですか！）、がしばしば蘇よみがえってきます。大男でありながら穏やかな性格で周りを魅了していた外人さんでした。何故、急に頭に浮んで来たのか皆目かいもく分かりません。ちよつと面白いではありませんか。